

ヤスクニ・レポ 260

1995年一戦後50年を振り返る

須田 毅(JECA 西堀キリスト福音教会牧師)

福音派の教会で、1991年に私は洗礼を授かった。母教会は福音派の中では少数派であると思われるが、第二次大戦下をくぐった教会であった。

最近、戦後50年を迎えた1995年の頃を思い返すことがある。私は召命が与えられて神学校に在学していた。1995年当時、世界そして日本社会全体で第二次大戦後50年に思いを致していた。日本のキリスト教会もこぞって、戦責告白を作成した。私が属する団体は、戦後生まれの教会がほとんどである。それでも戦責告白を作成した。日本のキリスト教会に連なるがゆえ、という意識が作成の動機の一つであると説明されている。しかし、ブームに乗り遅れまいとするような雰囲気の中で作成したとも言えるのではないかと個人的には感じていた。

そのようなキリスト教会全体の雰囲気の中で、母教会の教職者の兄弟(霊的な、ということではなく実の兄と弟)たち(弟である主任牧師およびその兄であり神学校教師であった牧師)は、苦悩しておられた。ご兄弟の父上が、第二次大戦下にあつて、当時属していた地方教団のリーダーであり、宗教団体が施行されて後に、日本基督教団への加入を決定した責任者の一人であった。戦後50年の頃、第二次世界大戦当時において、そのような時流に乗った教団の動きについて、国家体制の中に自ら巻き込まれていった責任者の立場にあった父上に対して、厳しく非難する声もあったのである。

1995年頃、当時の福音派の中で、結局は主流派と同様、福音派も抵抗らしい抵抗をせず時流に飲まれたのだ、という一つの事例として母教会のことが取り上げられた。歴史的事実の反省が中心である研修や講演にて、講演者などから事例研究が発表された。そして、福音派である私たちもまた神に対して悔い改めて、現在を生きなければならない、というような呼びかけられがたびたび為された。

そのような主旨の講演会に、母教会の神学教師である、兄牧師が出席された出来事があった。私はその講演会に参加していなかったが、参加者の一人が、その講演会での質疑応答での、講演者と、母教会の兄牧師とのやり取りがあったと報告してくれ

た。講演者は、第二次大戦下の上記の地方教団のリーダー、つまり母教会の兄弟牧師の父を、日本基督教団に加入することで、国家体制に進んで入り込んだ過ちを犯した人物だとして断罪した。それに対して、母教会の兄牧師は「その指摘は事実ではあるが、その時代状況の中で、全く無抵抗で国家体制に巻き込まれたわけではない」という反論をした、ということであった。詳細な報告ではなかったが、とにかく戦時下のキリスト教会は過ちを犯したのだ、という反省が繰り返されていたため、個人的には、親しさを覚える母教会の牧師先生であるとしても、その兄牧師の質問は、自分の父親の名誉を守るかのような、ある意味、自己保身のような行動ではなかろうか、と感じさせられた。

兄牧師とは、神学校の授業の場で、戦後50年のことで、話し合うことがあった。他の神学生と共に、時折ではあるが、そのような機会には、兄牧師は、少々、防戦一方のような印象を受けた。生意気な神学生たちは、現実には歴史的事実についてさへ知識不足であった。また、1995年に生きるキリスト者たちは、「第二次大戦下のキリスト者たちの信仰は不徹底だった」と思慮なく裁くような雰囲気でも満ちていたのではないかと思われ、神学生たちこそそのような雰囲気にもたれかかって、その戦時下のキリスト者たち・教会を断罪していたのではないかと振り返っている。

兄牧師の講義の途中で、戦時下のキリスト教会を責めるような見解を、神学生たちは兄牧師へぶつけたことがあった。その際に、兄牧師は「神学生の皆さんの指摘は正しい。国家主義に巻き込まれたことが間違いだったことは確かである。朝鮮半島に出向いて神社参拝を日本基督教団統理が説得に出向いたことなど偶像礼拝に関わったことも間違いであり、それはすべきことではなかった。では、あなたがたが、もし、第二次世界大戦の下で教会生活をしていただければ、あなたがたが言うような明瞭な抵抗ができたのでしょうか？」とおっしゃった。

それまで威勢よく断罪するかのように語っていた神学生たちは、みな黙ってしまった。「先生、私

たちが今まで間違いを指摘していたように、第二次大戦下にあつて、主なる神に対して恥ずかしくないよう、敢然と戦うことができます」などと応える者はいなかった。兄牧師は続いて、「第二次大戦下のキリスト教会の誤った歴史を教訓として、今、神の教会らしい健全な歩みをするために、私たちはどうすれば良いと考えますか」という質問が兄牧師から続いて投げかけられた。その問いかけに対し、あいかわらず神学生たちは黙ってしまった。「須田さんは、どう考えますか？」と、母教会の教会員でもある私に、先生は問われた。「…わかりません。どうすれば良いか、先生のお考えをお聞かせいただけますか？」と答えるのが精いっぱいであった。

兄牧師もまたしばらく沈黙した。他の神学生から意見が出るのを待っていたのかもしれない。しかし、全体の沈黙が更に続いて後に、おっしやった。

2021年10月15日例会奨励「地は呪われている」 創世記3章17節 須田毅牧師 (JECA 西堀キリスト福音教会)

しばらく前、ある新書(『『戦争体験』の戦後史』福間良明著、中公新書、2009年)に、上記の兄牧師の名を見つけた。戦没者学生の手記・遺書を編んだ「きけ わだつみのこえ」の先に出版された、同趣旨の編集による「はるかなる山河に」について、同時代人である兄牧師が批評していると、福間氏は紹介する。自らも学徒動員するも生きて日本に帰還した兄牧師が冷酷に評している、という。

神学校を中心に、兄牧師より温かい多くの指導を受けた記憶と、少々、容赦のない冷静な視点の持ち主だった印象が、私にある。受洗教会が新会堂献堂を祝う行事にて、会堂の片隅で私にこうおっしやった。「今日のお客達は『立派な会堂ですね』とほめるが、後の時代の人には『貧しさをまとった主イエスを証しするのに、立派な会堂が必要か』と批判するかもしれませんよ」。兄牧師の実家でもある教会なのに、その祝いの機会に何をおっしやるのか、と呆氣にとられた。

神学教師として理性的な姿の記憶がほとんどだが、学徒動員によって南方にて通訳をしていたエピソードを、授業中に語られたことがあった。兄牧師には珍しく情緒的な話だった。敗戦直後に戦地にて米軍捕虜となり、酷暑の中で朦朧として長時間歩き、道の傍らで「灼熱の中で真っ赤に咲くハイビスカスを見て、『地は呪われている』と強く感じた」とのことだった。私はこの言葉が理解できなかった。「酷暑について、捕虜の立場について、戦争に

「福音宣教です」。

それを聞いた直後はピンと来なかった。しかし、時間が経過してから、ある程度は受け止めることができた。戦時下であっても、むしろ、この2021年であっても、私たちキリスト者の課題は人間のたましいの事柄である。神に対する罪を悔い改めて、まことの救いを得て生きるのだから、個人の罪ゆえに生じる愚かさを捨てる志を保持できない。そして、人間社会に生じる悪の問題と戦うことはできない。神が人間のたましいの救いの完成を導くことを信じなければ、被造世界全体も含む救いの完成を遠くに見ながら生きることができない。今、福音宣教と真摯に取り組み、社会正義も主の恵みによって整えられていくという確信がなければ、教会内で次世代に課題を引き継げないし、教会外へ証しすることも弱いままであろう。

ついて、ハイビスカスの燃えるような赤が結びついたのであるか？」くらいにしか感じなかった。

冒頭の新書中に、兄牧師の批評が次のように引用されている。

「弾圧に反抗し続けた人間性を再確認して喜ぶことは、彼らに悲劇を見ることにとどまる。そして私たちは悲劇によっては救われない。(中略)「失われなかった人間性」[『はるかなる山河に』巻末の編者あとがきのタイトル]は悲しく咲く美しさにもかかわらず、又救いを常に求めるのにもかかわらず、それ自身で暗黒を払う力はなかったのである。(「書評 はるかなる山河に」)」。

ハイビスカスの話は単なる感傷的な話ではないのだった。同世代の戦没学徒に対する共感は、兄牧師に当然あったろう。しかし、それを突き放すほどに、兄牧師は人間の罪の暗黒を、ハイビスカスの赤の中に見ていたのだと、私は思う。兄牧師は「私は神学教師ですが、伝道者です」と時々語られた。それは、戦時下を中心に、現実の罪の暗黒を歩んだ自覚がご自身におありだったからではないか、と思う。そして、人間自身に振り払うことのできない暗黒からの救いを伝える使命を、深く刻むゆえの自己認識だったのである。戦後50年という記念行事的なムーブメントでなく、絶えざる罪認識がなければ、時代を越えて、呪われた地が贖われるための奉仕はできないと自覚させられる。